様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ００００５

研究課題名（和文）「出版のアーカイブ学」による近現代日本美術史の拡充――美術出版社の新出資料から

研究課題名（英文）An Expansion of Japanese Modern and Contemporary Art History through Publishing Archives - From the Bijutsu Shuppansha Documents

研究代表者
西野　嘉章（NISHINO, Yoshiaki）

東京大学・総合研究博物館・名誉教授

研究者番号：２０１７２６７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　19,200,000円

研究成果の概要（和文）：東京大学総合研究博物館に寄贈された美術出版社の写真ネガフィルム・コレクション（合計126,781コマ）を調査、修復、デジタル化し、データベース構築に向けて個別に日英バイリンガルで記載した。その結果、戦後日本美術史研究の基礎となる一次視覚資料体を再形成した。公開ディスカッションでこのアーカイブの内容と歴史的意義を分析し、それが美術史学においてもたらす方法論的改革の可能性について議論した。国外の主要美術館と連携し、戦後日本美術の統合的な写真アーカイブを国際的に共有する方法を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
美術出版社が出版活動のなかで撮影した写真資料を統合的にアーカイブ化したことによって、戦後日本美術史の基礎資料の公開範囲を大幅に拡充した。このアーカイブはこれまで戦後日本美術史を形成した図像（イコノグラフィー）を大きく変革するもので、戦後日本美術史の方法論的転換をもたらす。また日本美術の統合的な写真アーカイブを国際的に共有することによって、この資料体が「ワールド・アート・ヒストリー」にも組み込まれる。

研究成果の概要（英文）：We researched, restored, digitized, and individually described (in Japanese and English) the collection of negative films of photographs from Bijutsushuppansha (consisting of 126,781 cuts), which was donated to the University Museum, the University of Tokyo, in order to constitute a database. As a result, we have considerably extended the visual corpus that serves as the basis for research on postwar Japanese art history. We analyzed the contents and historical significance of this archive in a public discussion, and considered the potential methodological reforms it could bring about in art history studies. In collaboration with major museums outside Japan, we reflected on propositions of ways to share this integrated photographic archive of postwar Japanese art on an international scale.

研究分野：美術史学

キーワード：美術アーカイブ　出版アーカイブ　戦後日本美術　写真

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2019 年に美術出版社の写真ネガフィルム・コレクションが東京大学総合研究博物館に寄贈された。このコレクションには、1956 年から 1987 年まで美術出版社専属カメラマンとして活躍した酒井啓之（1932-2007 年）による写真を中心に、雑誌や書籍を飾ったもののほか、実際には誌面に載らなかった写真もほぼ全て含まれている。1943 年、美術雑誌の統合を機に設立された日本美術出版株式会社は、1948 年に美術出版社に改名し、『みづゑ』『三彩』『美術手帖』『美術批評』をはじめ戦後日本美術界を牽引する雑誌を発行した。当社が取材のために派遣したカメラマンが撮影した写真のネガフィルムはこれまで社内で保管され、基本的に学術研究の対象とならなかった。ネガフィルムは、アーティストの肖像そして展覧会のオープニングなど美術関連のイベント風景をはじめ、戦後日本美術界の全体像を描くものであり、戦後日本美術史の基礎となる資料体と研究の方法論を大きく変革するものである

このネガフィルム・コレクションの再評価の背景には、約 30 年に亘る戦後日本美術研究の顕著な前進がある。1994 年に横浜美術館で開催された『戦後日本の前衛美術』を皮切りに、日本語のみならず英語およびフランス語での研究書が多数発行され、大規模な展覧会が開催されてきた。その主な要因として、三つの学術的転換を挙げられる。1）戦後美術における「パフォーマンス」（物質的な作品に依拠しない、一過性の「行為」を生み出す芸術的創造）の誕生が注目されるなか、戦前の「マヴォ」をはじめとする 20 世紀日本人前衛アーティストによるパフォーマンスの先駆性が認められた。その結果、戦後日本美術史自体が見直され、いまや「実験工房」や「具体美術協会」など 1950 年代の美術運動が生み出したパフォーマンスがその中枢をなしている。2）いまでも現代美術の根本的問題である「アートの定義」に対し、「芸術・非芸術・反芸術」をテーマに、従来のアートのジャンルを横断もしくは融合するかたちで創造活動を行なった 1960 年代の日本人アーティストの独自性が再評価された。とりわけ、日本における「インターメディア」の美術史が新たな研究対象となっている。3）ジャポニズムに由来する日本美術の異国趣味的イメージとは裏腹に、極東から欧米の現代美術に呼応もしくは同調しようとする戦後日本のアーティストたちが掲げた「国際的同時代性」（international contemporaneity）が欧米において新たな研究テーマとなった。その結果、欧米中心の近現代史に、戦後日本美術の動向も組み込まれつつある。

物質的作品の存在に依拠せず、様々な分野を融合する「行為」としての美術的創造が研究されるなか、方法論的問題が生じている。研究書および展覧会は、「パフォーマンス」「イベント」「ハプニング」を含む一過性の作品を記述し、美術史学的に位置づけるために四種類の基礎資料に頼ってきた。1)作品もしくはその準備過程に直接関わる資料（原稿、スクリプトなど）、2）作品の公開にあたって発行された一次資料（チラシなどエフェメラ）、3）作品の参加者や目撃者または評論家による言語的記述（文章およびオーラルヒストリーを含む）、4）アーティストもしくは関係者、報道などによる記録写真や映像。写真映像技術が急発展した 1950 年代以降のアートは、以前と比べて、写真および映像による記録が圧倒的に多いことが特徴的である。

1990 年代半ばより美術史学において方法論のパラダイム転換を促した「図像論的転回」（iconic turn）に基づいて、戦後日本美術の専門家は一過性の作品の存在根拠となる記録画像を集中的に集め、証言として残る言語的記述と組み合わせて分析してきた。ところが、視覚的資料の比重が高まるなか、その根拠となる記録写真および映像が問題となっている。現存する記録画像は主に 1）撮影者のアーカイブに残っているもの、2）出版物に掲載された写真やテレビで報道された映像に大別される。しかし前者はほぼ全て公開済みで、新たな発見は見込めない（近年公開された同世代の写真家の主なアーカイブは羽永光利（1933-1999 年）、安斎重男（1939-2020 年）の写真資料である）。また後者の使用にあたって、方法論的問題が生じる。「報道」を優先するが故に、出版物の編集者やテレビ・ディレクターは「ハプニング」のもっとも象徴的な瞬間を捉え、印刷物やテレビで公開した。すなわち、一過性と即興性を本質とする時間的作品に対し、その一場面を「アイコン化」してきた。現在、戦後日本美術を研究する際に扱う画像資料は主に、この種の数少ない「アイコン的」画像である。その結果、大半の研究書および展覧会において掲載されてきた数少ない画像が、戦後日本美術史の基本的な資料体となった。

ところが美術出版社の写真ネガフィルム・コレクションは、その内容と規模から、戦後日本美術の記録写真の資料体を再形成するだけでなく、上述の通り「象徴的瞬間のアイコン化」に頼ってきた戦後日本美術史そのものの方法論的革新を促すことになる。

２．研究の目的

本研究の主な目的は、美術出版社の写真ネガフィルム・コレクションを美術史学的な観点から調査し、大学博物館の機能を最大限に活かしながらアーカイブ化することによって、戦後日本美術史研究の基礎となる一次資料体を再形成し、パフォーマンスなど非物質的な存在に依拠する作品の研究方法を見直すことにある。そのために、美術雑誌や研究書などにすでに掲載された写真等とその周辺や前後に作成された資料を比較し、組み合わせることによって、当時公開や報道された内容に左右されることなく、現存する全ての記録資料を批判的観点から扱えるようになる。美術界を印象付けた「決定的瞬間」の羅列ともいえる戦後日本美術史研究における記録写真の扱いを革新すべく、対象となるそれぞれの人物や出来事において、「決定的瞬間」を捉えた公開済みの写真とまだ未公開であるその周辺の写真を組み合わせ、一つの流れとして再現する。

本研究を支えるのが、その大胆な仮説である。数点の新出資料が見つかると、これまでの記述や学説を訂正し、より正確に表現することができる。しかし約 12 万点もの新出資料が美術史の基礎資料体に加わると、研究の方法論自体が本質的に変わらざるを得ない。この課題を解決するために、情報工学および博物館学のノウハウを導入し、美術史学・美術出版史・ビッグデータを組み合わせた研究方法をとる。例えば、データベースの機能を活用して、ある日に撮影された全写真を自動的に並べることが可能になる。その結果、これまで見えなかった、複数の出来事の同時性や関連性が可視化される。そこから、研究者にとって貴重な新しい知見が多く生まれることが期待される。その過程のなかで、本研究は美術出版の書誌学的研究にも貢献する。発行された雑誌に対し、その素材となる全写真を提供することになって、編集者の選択や時には検閲を含む、当時の雑誌編集の実況を生成学的に解明できるようになる。

この成果を国際的なレベルで共有するために、戦後美術のアーカイブを扱っている欧米の主要機関と連携して、戦後日本美術の統合的な写真アーカイブを国際的に共有し、この資料体が長期に亘って「ワールド・アート・ヒストリー」にも組み込まれるようにするのが最終的な目的である。その結果、戦後日本美術の図像が国内外で幅広く共有され、学術的にも社会的にもその認知度が高まることを期待する。

３．研究の方法

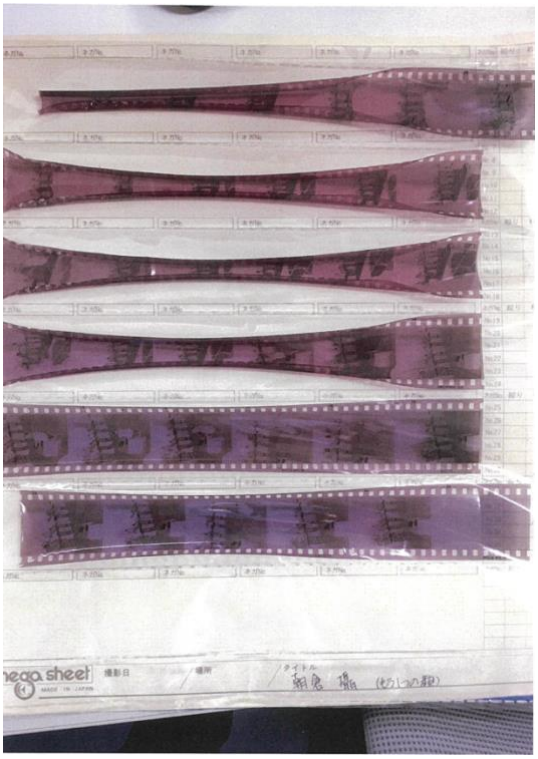
本研究を実施するにあたって、複合的な方法論を採用した。126,781 コマに及ぶ写真資料体を、従来の美術史学的方法をもって研究し切れない。そのため、本研究では、大学博物館で長年実践してきた、情報工学によるデータ処理と博物館学によるアーカイブ化を組み合わせ、この資料体を整理し、一般公開することにした。ネガフィルム・コレクションをこれまでの博物館所蔵の標本や資料と同等に扱い、修復・整理・デジタル化・記載を経て、データベース化した。

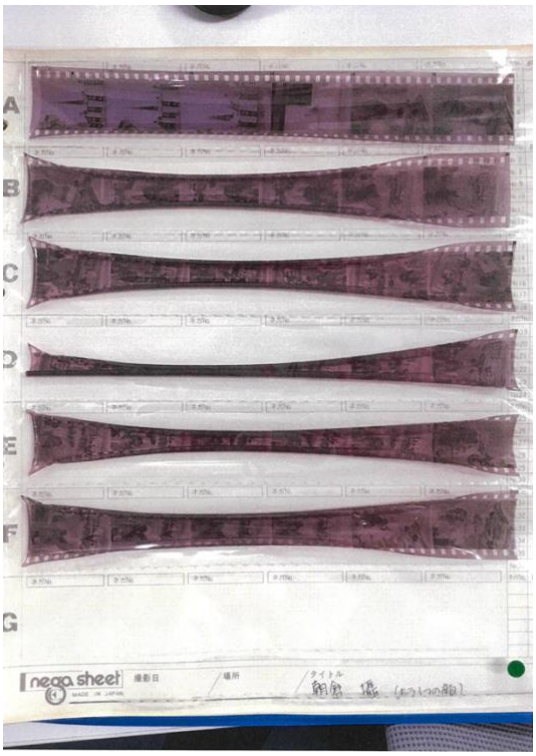
まずはクリーニングを経たネガフィルムを、その保存状態によって三つのカテゴリーに分けた。保存状態のよいものを先にデジタル化しつつ、劣化したフィルムを修復した。劣化したフィルムのなかには、カールしたフィルムを平滑化して機械的にスキャンできるものと、平滑化はできたものの機械的にスキャンできる状態に修復できなかったものと、二種類あった。修復できなかったフィルムは劣化した状態のまま、可能な範囲で個別にスキャンした。一方、フィルムの表層に劣化による凹凸が生じている場合もあった。それらに関しては、鮮明なデジタル画像は得られなかったものの、その状態でスキャンしてアーカイブに加えた。重度に劣化したフィルムはスキャン不可能で、簡易的なクリーニングを施したうえで保存してある。

ネガフィルム・コレクションはもともと、499 冊のネガフィルム・アルバムに収納されており、被写体別に五十音順に整理されていた。3 つの種類のネガフィルムを確認した。35 ミリフィルムのほか、120 フィルム（通称「ブローニー」）と 4×5 フィルムもあった。アルバムの順番を踏襲しつつ、フィルムを整理し、一コマ一コマに標本番号を付与した。その標本番号をもとに、それぞれの写真を記載し、分かる範囲で被写体、撮影者、年代、関連情報を日英バイリンガルで記載した。この作業によって、データベースと現物との照合が可能になった。また、それぞれのフィルムがどのようにアルバムに収納されていたか分かるように、アルバムのネガシートを各ページ撮影し、インデックス・シートを作成した。その結果、寄贈当初のネガフィルムの状態を記録しつつ、写真を個別に活用できるようになった。

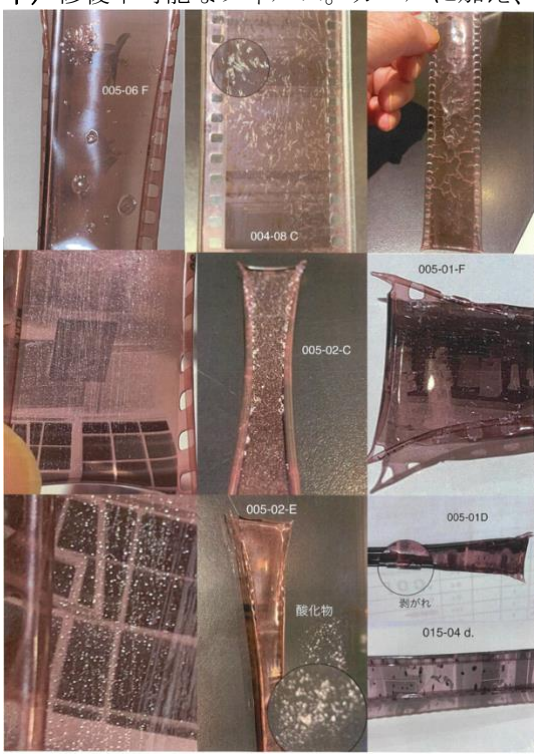
これをもとに、戦後日本美術史の代表的事例を複数取り上げ、関連する写真を検索した。特にパフォーマンスやイベントに注目し、これまで美術雑誌などに掲載された写真とその周辺の未公開写真を比較した。写真は三つの種類に大別できる。まずは取材の一環として撮影された芸術家の肖像写真とアトリエの風景写真がある。その大半は 35 ミリフィルムに収められている。肖像写真を比較すると、芸術家の表情に変化はあるものの、顕著な差異は見受けられない。しかし掲載済みの写真を確認すると多くは切り取られており、背景にあるアトリエの風景が見えない

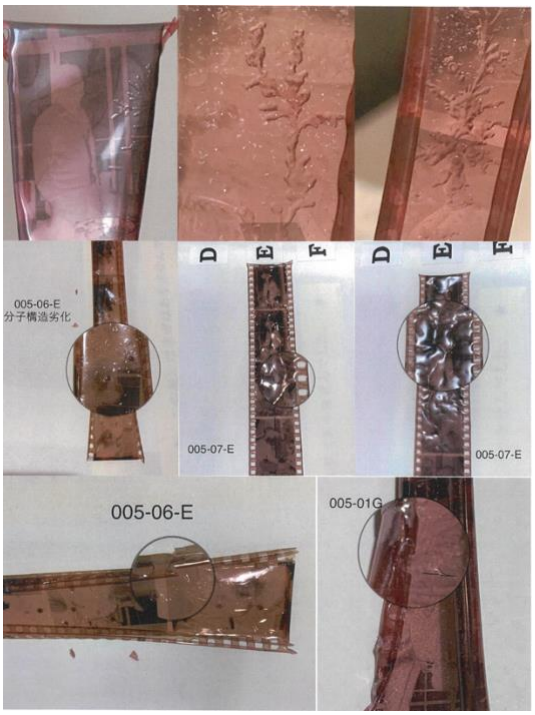
場合が多い。そのため、ある芸術家の制作現場を調査するうえでは、この新出資料は貴重である。次に作品としてのパフォーマンスもしくは展示のオープニングやシンポジウムなどある出来事を記録した写真がある。本研究においてこのカテゴリーは特に重要である。これまで美術雑誌や研究書に掲載されてきたパフォーマンスや出来事の記録は極めて限定的であるため、このネガフィルムでその一連の流れを辿ることが可能になる。これらも大抵 35 ミリフィルムに収めれたが、120 フィルムもある。最後に作品の複製写真、そしてミュージアムやギャラリーの外観写真がある。これらは 120 フィルムもしくは 4×5 フィルムに収められてある。作品の複製写真には、現存しない作品の貴重な記録も含まれている。ミュージアムやギャラリーの写真もまた、その一部は改装や解体工事の対象となったため、その時点の姿を留めた一次資料となる。





上）劣化した 35 ミリネガフィルムの事例。A 列および F 列のフィルムは平滑化できる状態にあるが、D 列のようにカールした状態で硬直したフィルムは修復不可能であった。
下）修復不可能なフィルム。カールに加え、分子構造も劣化している。





表層が劣化したネガフィルムのデジタル画像

ネガシートを撮影したインデックス・シート

４．研究成果

本研究の直接的な成果として挙げられるのが、126,781 点に及ぶ戦後日本美術関連写真のネガフィルムの整理、修復、デジタル化、記載そして一般公開である。多くの新出写真を含む美術出版社アーカイブは、日英バイリンガルのデータベースに公開されることによって、専門家のみならず戦後日本美術に関心のある方にも幅広く共有される。その結果、長期に亘って戦後日本美術の国際的な認知度の向上が期待される。国内外の専門家がこの資料体を研究に活用することによって、戦後日本美術史における記録写真の位置付けがより緻密になるのと同時に、国際的な観点から構築されつつある「ワールド・アート・ヒストリー」における戦後日本美術史の重要性が高まる。

一方、この資料体をもとに進めた比較研究が、戦後日本美術史における新たな方法論的パラダイムのプロトタイプになった。限られた記録写真をもとにイベントやパフォーマンスを記述してきた美術史学研究に対し、その数十倍に及ぶ点数の写真を活用した図像学的研究の基盤を示すことができた。特に「パフォーマンス」「イベント」「ハプニング」を含む一過性の作品に対し、その一連の流れを網羅できる、いわば映像に近い「動的な記録」を活用した研究方法を導入した。この方法論の導入について、2023 年 3 月 24 日にインターメディアテクで開催されたディスカッション『戦後日本美術の決定的瞬間 ― 美術出版社写真アーカイブの現在』で議論した。ディスカッションではアーカイブの特徴と歴史的意義、そして美術史研究のみならずアート全般におけるその現在性を検証したうえで、アーカイブの更なる可能性として、オーラルヒストリーとの組み合わせを検討した。

本研究の長期的目的として、世界各地の主要ミュージアムとの連携に基づく美術史学アーカイブの共有と共同構築も挙げていた。これに向けたケーススタディーとして、ニューヨーク近代美術館の日本美術アーカイブを調査し、汎用性の高いデータ構築方法を検証し、日本美術史アーカイブのプラットフォーム共有の可能性を探った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 西野嘉章	４．巻 第23号
２．論文標題 『芸術創作工房』から、すべてが始まった	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ACAC : Aomori Contemporary Art Centre	６．最初と最後の頁 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kei OSAWA	４．巻 0
２．論文標題 Lustres de l'abstraction	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Toshimasa Kikuchi : Objets mathematiques	６．最初と最後の頁 4-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 西野　嘉章	４．巻 第768号
２．論文標題 戸田ツトムと「コミックペーパー」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『ユリイカ』	６．最初と最後の頁 210-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kei OSAWA	４．巻 2020-1
２．論文標題 Tokyo Underground - Le topos des avant-gardes japonaises au tournant des annees 1960	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Perspectives	６．最初と最後の頁 267-280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計3件

１．著者名 西野　嘉章	４．発行年 2020年
２．出版社 玄風舎	５．総ページ数 358
３．書名 書姿考ーー拙著造本篇	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森　洋久 (MORI Hirohisa) (10282625)	東京大学・総合研究博物館・准教授 (12601)	
研究分担者	Ｏｓａｗａ　Ｋｅｉ (OSAWA Kei) (80571231)	東京大学・総合研究博物館・特任研究員 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関